

「稲倉大明神」という神名と信仰の展開に関する一考察

—孝霊天皇の伝承と、米と米蔵の守り神という信仰の可能性について—

佐々木亮（株式会社角間川）

【はじめに】

角間川に古くから鎮座する九郎兵衛稲荷社のすぐ脇に、「稲倉大明神（イナクラダイミョウジン）」と刻まれた一基の石碑が建っている。明治二年八月の建立で、二段の台石の上に、高さ約 1.2 メートルの自然石を載せた石碑である。建立の経緯や由緒を伝える資料は見当たらない。ただ「浜の稲荷」と呼ばれていた（『大曲市の歴史散歩』より）ようである。河港のまちだった当地で「浜」と言えば河港の荷揚げ場を指し、この石碑が河港と深く関連する可能性を示唆している。

さて、「稲倉大明神」という神名は、全国的に広く見られる名称ではなく、比較的珍しいようだ。たとえば、秋田県の鳥海山の側には「稲倉岳」と呼ばれる山があり中腹に「稲倉神社」という神社もあるようだが、この神社や山が広い地域で信仰の対象となっているという訳ではない。本稿では、この「稲倉大明神」という神名がどのように成立し、どのような信仰と結びついていたのかについて考察を試みる。

【考察の視点】

いわゆる「お稲荷様」は、稲を象徴する穀霊神・農耕神として信仰されており、五穀を司る宇迦之御魂神（ウカノミタマノカミ）と同一視される。ウカノミタマは伏見稲荷大社をはじめ、多くの稲荷神社で主祭神とされ、『古事記』では「宇迦之御魂神」、『日本書紀』では「倉稲魂命」と表記される。

このため、「稲倉大明神」という神名も「倉稲魂命」の別称であるかのように見えるが、実際にそのような用例は確認できず、明確なつながりを示す資料等は見つけられなかった。よって、角間川の稲倉大明神に「浜の稲荷」という別称があっても単純に稲荷神と結び付けることはできず、むしろ「稲倉大明神」は、独自の成立事情を持つ神名である可能性が高いと考えた。

本稿では、この神名の由来と信仰の性格について、

- ① 伯耆国（現・島根県）に伝わる孝霊天皇の故事
 - ② 舟運と物流における「米と米蔵の守り神」としての信仰
- という二つの視点から考察する。

【孝霊天皇の故事と山容の信仰】

昭和 2 年刊行の『伯耆民談記』42 頁には、現在の島根県日南町新屋に鎮座していた「稲倉大明神」という神社に関して、次のような由緒が記されている。

「(孝霊天皇) 鎮座の山を御笠山という。この山、孝霊天皇が稲を積せられし跡なれど、山の形、稲隈の如し。此故に稲倉大明神と号す」

この神社は現在「多里神社」と称されており、鳥取県神社庁の記録にも「近世まで稲倉大明神と称されていた」とある。稲倉大明神は伯耆国の神社に伝わる第 7 代孝霊天皇の伝承と関係があるようだ。

また、この「稲隈 (いなくま)」という語は何を指すのか。調べると、愛知県岡崎市稲熊町には延喜式内社「稲前神社 (いなくまじんじゃ)」があり、同社はかつて伊勢神宮への奉納稲を納めた神倉であったとされる。古記録においては「稲隈」とも記されたとある。よって、稲隈は稲 (米) を納める倉という意味と解される。

このように「稲隈」が米倉を意味する語であったとすれば、故事は「山容が稲を納める倉のようである」と解される。そして、語彙から「稲隈・イナクマ」転じて「稲倉・イナクラ」となり、御笠山を御神体として「稲倉大明神」と称するようになった神名の形成過程が『伯耆民談記』に残されていたことが分かった。

このように山容と故事の結びつきによって神名が生まれるのは、古代的な自然崇拜や山岳信仰、さらに古代天皇の神格化と結びついた磐座信仰の文脈の中で容易に理解できる。

【舟運と「浜倉」の守り神としての信仰】

一方、角間川における稲倉大明神の石碑は、九郎兵衛稲荷社のすぐ脇、かつての角間川河港の至近に建つ。往時の河港には、舟運で運ばれた物資を一時保管する「浜倉」と呼ばれる倉庫群が建ち並び、明治期には 20 棟近くあったようだ。現在もそのうちの棟が神社のすぐ隣に残っている。

この立地と、「浜の稲荷」という呼称を合わせて考えると、当地における「稲倉大明神」は、米の売買や物流に欠かせない「米蔵」という、地域と密接不可分な要素が吸着剤となり、稲倉大明神の米蔵の守り神的な伝承と、稲荷神の持つ【豊作 (米)・商売繁盛 (蔵)・交通安全 (物流)】の守り神としての性格が結び付いて信仰が定着していたと考えられる。偶然、浜の近くに九郎兵衛稲荷があり、物資の集積・流通の中心地に隣接して祀られていたという点からしても、それが自然な推察になるのではないだろうか。

【おわりに】

こうして見てくると、「稲倉大明神」という神名は、一方では伯耆国において、孝霊天皇の故事と御笠山の山容に由来する固有の信仰に基づき、他方では、「稲」＝農耕、「倉」＝蓄積・物流・富 という象徴性を背景に、農耕や米蔵の守り神として広がった、と考えられる。そ

して、角間川においては稲荷神と混然一体となって、稲倉大明神が「浜の稲荷」と呼ばれ信仰されたと考えられる。

この信仰が山陰地方から日本海交易を経て秋田の内陸南部の河港のまちへと伝播したものなのか、それとも「稲倉」という語が持つ象徴性ゆえに各地で類似の信仰が自然発生的に生まれたのか――。いずれにしても、稲作と物流によって栄えたこの地に「稲倉大明神」信仰が伝えられた時、「稲」と「倉」という神名そのものが、角間川の人々の信仰心を自然と集めたのだらうと感じられた。摩滅の進んだ一基の石碑を手がかりに、日本人が古来から持つ自然崇拝に寄った素朴な信仰心に思いを馳せてみたが、今後はこの信仰の伝播経路についても、より詳しく調べを進めてみたい。

【参考文献・資料】

『伯耆民談記』42 頁、昭和 2 年、国立国会図書館デジタルコレクション（令和 7 年 7 月 9 日閲覧）

<https://dl.ndl.go.jp/pid/1191884/1/26?keyword=%E7%A8%B2%E5%80%89%E5%A4%A7%E6%98%8E%E7%A5%9E>

鳥取県神社庁「多里神社」神社由緒（令和 7 年 7 月 9 日閲覧）

<https://tottori-jinjacho.jp/pages/734/>

岡崎おでかけナビ「稲前神社」（令和 7 年 7 月 9 日閲覧）

<https://okazaki-kanko.jp/point/506>